

創立145周年



学校だより  
はえ  
南風の子

中種子町立  
南界小学校  
平成31年2月20日

## かけがえのない命は自分で守る

校長 吉留 巧

昨年の2月の学校だよりには、インフルエンザによる臨時休校のことが書いてあります。全国的には流行したインフルエンザですが、ここ南界小では、各家庭や学校全体で気をつけたおかげか、または暖冬傾向のせいかな、今年はまだ一人も患者の発生はありません。でも、油断は禁物、これからも予防に気をつけたいと思います。

さて、東日本大震災からまもなく8年が経とうとしています。国内観測史上最大規模の地震と津波によって、1万5800人以上の方がお亡くなりになり、まだ、約2600人の方々が行方不明になっています。

そして、町の壊滅と原発事故の影響から、多くの人々が普通の暮らしを失い、厳しい避難生活や家族との離れ離れの生活を余儀なくされました。現在でも約7万3千人の方々が避難生活を送っているそうです。

一方で、この震災は人間の真の強さも教えてくれました。大きな悲しみや不安を抱えながらも、互いに励まし合い助け合いながら一生懸命に生きようとする人々の姿が、国中に勇気と感動を与え、明日への希望を抱かせたことを忘れません。また、世界の人々からの励ましをいただきました。

学校では、年に3回地震や火災、風水害を想定した避難訓練を行っています。特に、地震は、いつ・どこで発生するかわかりません。いかなるときに地震に遭っても、危険から自分の身を守る「第1次避難」をすること、その場所で危険から身を守る行動を取ることが大切です。次に、揺れが収まったら自分の安全を守るために、どこに避難したらよいか「第2次避難」をすることが大切です。場所によっては、1秒が自分の命を左右します。そして、自分の避難行動が周りの人の行動につながり、他の人を助ける行動につながります。

この地震でたくさんの方々が犠牲になりましたが、岩手県釜石市の3000人近い小中学生の子どもたちほぼ全員が無事に避難した「釜石の奇跡」がありました。実は、釜石市の各小中学校は、群馬大学の片田教授の指導のもと、数年間防災教育プログラム「命を守る避難の三原則」に取り組んでいたというのです。（この日、釜石市では一般の方々が1000人以上亡くなっています。）

この「命を守る避難の三原則」とは

### 1「想定にとられないこと」

釜石市にはハザードマップ(災害予測地図)があり、津波による浸水の予想される地域には、地図上に色が塗られています。過去の津波に基づいて作られた予測だから想定通りの津波がくるとは限らない。もしかしたら想定以上の津波がくるかもしれない、ということ常にと頭にに入れておくことが大切と教えてもらっていたそうです。

### 2「その状況下において最善を尽くせ」

津波の危険があるところであれば、少しでも早く、少しでも高いところに避難することが大切だということ。自分で判断し、最善を尽くした行動をとることが大切だということです。

### 3「率先避難者となること」

人は避難すべきと分かっているときでさえ避難をためらうものです。他に誰も避難しない中で、自分だけ避難する気にならないことは自然なことです。でも、他の人が避難をためらっているとき、勇気を出して最初に避難する人間になれるということです。みんなが様子を見ている状況を打ち破ること、真っ先に逃げることで他の人も逃げようとします。逃げる行為が人を助ける尊い行為になるのです。

片田教授は、自分の命を救える子どもになる教育を続けることも重要だと言います。「この子どもたちはやがて親になる。津波から逃げる大人がいれば、子どもたちもちゃんと逃げます。」と。

南界の子どもたちが大人になる近い将来、南海トラフを震源域とする巨大地震が発生すると言われています。その時に、かけがえのない命を自分で守ることができる行動がとれるようになってほしいと願います。